

性的マイノリティが形成する家族観

堀川 真理恵

近年、渋谷区内で同性カップルのパートナー関係を証明する条例を制定するなど、性的マイノリティの家族をめぐる活動が活発化し、日本社会全体での家族の多様性が求められている。先行研究では、性的マイノリティと家族の関係が人生における個々の場面で論じられてきた。また、生まれ育った家族と当事者がこれからパートナーと築く家族は分けて記述され、それぞれ「選べない家族」と「選びとる家族」と、研究者の立場からの区別がなされてきた。本研究では、人生全体の語りから性的マイノリティー一人ひとりがどのような家族の物語を作るのかに着目する。そして、「家族」という価値観が、個人の人生の文脈においてどのように意味付けられ、形成されていくのかを明らかにすることを目的とする。これらを明らかにしたうえで、性的マイノリティの家族観が一様ではないことを提示し、今後の性的マイノリティの家族の在り方に再考をもたらす一助になることを考えている。

本研究では、ライフストーリーを研究手法として採用する。ライフストーリーとは筆者と語り手の相互作用により、語り手が個人の人生をどのように意味付けるのかを読み解くものである。ライフストーリーにおける聞き手の立場は、語り手の応答に影響を及ぼすだけではなく、語り手の語りを解釈するという面でも重要な役割を担っている。対象者は2017年4月から10月にかけて、自らを性的マイノリティと自認する9名に対して行った。

本研究において、個人それぞれのライフストーリーを読み解いたうえで、次の3点に言及する。1点目は、当事者が一様の家族の在り方を望むわけではないということである。たとえ同性婚ができるようになったとしても、性的マイノリティの偏見がなくなる限りしたくない者、結婚という制度に疑問を抱いている者など、それぞれが今の社会状況の中で自分の望む家族の在り方を模索している。2点目は、生まれ育った家族とこれからパートナーと築く家族を、当事者自身は必ずしも「選べない家族」と「選びとる家族」として捉えていないという点である。当事者は、それぞれ生まれ育った家族をどんな存在として捉えるかは異なり、2つの家族を自分の基準で対比させる中で、これから自分が築く家族との違いを語っている。3点目は、社会に多様性をもたらすという文脈で取り上げられる性的マイノリティが、「多様」という言葉に様々な意味合いを見出している点である。これは、性的マイノリティである自分に対する社会の視線の捉え方が、当事者それぞれで異なっているからであると考えられる。

以上のことから、性的マイノリティの家族観が一様でないことは明らかである。そのことを踏まえたうえで、今後あらゆるセクシュアリティの人々が自由な家族の在り方を選択できるような一層の配慮が求められる。

(指導教員 照山絢子)